



教職大学院 Newsletter

No. 158

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科 since2008.4 2022.5.23(公開版)

教員養成フラッグシップ大学とその改革構想について

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学
連合教職開発研究科 研究科長 柳沢 昌一

3月9日、福井大学は、東京学芸大学・大阪教育大学・兵庫教育大学とともに、文部科学省より教員養成フラッグシップ大学に指定されることとなりました。「主体的・対話的で深い学び」を基軸とする公教育改革の中心的な担い手の力量形成を支えるために、先導的な役割を果たしていくこととなります。その出発にあたって、福井大学におけるフラッグシップ構想について「構想調書」よりその論点を共有しておきたいと思います。福井大学の構想のテーマは以下の通りです。

「主体的・対話的で深い学び」を支える教師の実践力を培うために：

省察的実践の長期漸成サイクルをコアとする養成研修カリキュラムの実現と

学校・教育委員会・地域・大学「専門職学習コミュニティ・DX多重協働ネットワーク」の構築

構想では冒頭において、世界において、そして日本において、いま求められている学びのあり方について確認しています。それは教職大学院において繰り返し共有してきていることですが、それを改めて以下のように再定位しています。

求められる力(コンピテンス)とそれを培う学び： 変化が加速化し、前例のない事態の頻発と輻輳に揺れる世界において、状況を探り展開の可能性を見だし、協働して社会を発展させていく主体としての力を培う学びの実現が求められている。OECD の Education2030 では「変革を起こす力(コンピテンシー)」として「新たな価値を創造する力」「対立やジレンマを克服する力」「責任ある行動をとる力」の三つを挙げ、そうした力は自ら見通しを立て(Anticipation)、実践し(Action)、それを省察して(Reflection)再構成していく「連続した過程を通じて学習される」とし、そうした省察的実践の連続的サイクルを実現するためのカリキュラム・学習生態系の改革(eco-systemic change)の必要性を提起している¹。「主体的・対話的で深い学び」を目指す新学習指導要領²、ICT 化と DX の展開を踏まえ「個別最適な学びと協働的な学びの実現」をめざす「令和の日本型学校教育」への定位³は、世界的学習改革と課題意識・方向性を共有している。

上記のような学びを実現するためには、これまでの内容伝達・教授を中心とする学習の基本的なモードの転換、学習観の転換が求められ、とりわけ探究的な学びを支える教師の新たな力量が問われることになります。

内容

巻頭言	(1)	スタッフ自己紹介	(4)
院生自己紹介	(6)	令和4年度開講式	(22)
令和3年度長期実践研究報告作成一覧			(23)
令和4年度連合教職開発研究科年間計画			(25)

¹ OECD. (2018). *The Future of Education and Skills: Education2030*. 教育とスキルの未来. 文部科学省訳

² 中央教育審議会. (2016). 幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)

³ 中央教育審議会. (2021). 「令和の日本型学校の構築を目指して～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの実現～」(答申)

この学びを新たな支える力量について構想では以下の5点を提起しています。

「主体的・対話的で深い学び」を支える新しい教師の実践的力量:「主体的・対話的で深い学び」・省察的な協働探究プロジェクトの連続的展開を支えるために、教師には①公教育の理念②教育内容方法③成長発達に関わる理解に加え、以下のような新たな複合的な実践的力量が求められる。

- 児童生徒の協働探究の展開を促しコーディネートする力＝**ファシリテーション・コーディネーションの力**
- 個人・グループの探究プロセスを跡づけ、課題を析出し発展の可能性を探る力＝**「見とり」の力**
- 協働探究の展開をデザインし、発展に即して再構成する力＝**デザインする力**
- 長期的な探究発展の基盤条件を協働して構成するマネジメント力＝**マネジメントする力**
- 上記の4つの実践力と密接に関わりICTとそのネットワークを活かす協働の実践力＝**DX推進の協働力**

OECDにおいても、また各国の教育改革への提起においても、学びを支える教師の新たな力量の重要性については繰り返し提起されてきていますが、そうした力をどのようにして培っていくかについて、具体的な構想の提起までは至っていない状況にあります。教師の新たな力量形成のためのフラッグシップ大学構想が求められる所以でもあります。福井大学の「構想」においては、拠点校における協働研究の積み重ねを踏まえ、以下のような力量形成のための構成を提起しています。

教師の力量形成を支える養成・研修への展望: 学びを支える新たな教師の実践力は、これまでの伝統的な教授方法で伝達することはできない。それに相応しい新たなアプローチ、カリキュラムデザインとそのマネジメント、およびそれを実効あるものとして稼働させる組織と構成が不可欠となる。

- 養成・研修における学修そのものが**教師自身にとっての「主体的・対話的で深い学び」**と、**協働探究プロジェクト**サイクルの実体験となるように構成する。
- 児童生徒の学習活動の発展に**直接関わる実践を基盤**とし、それを深め発展させるための**研究を連動**させる。
- **多様な学習活動の事例を検討し比較検証し、発展的な学習過程とデザイン**を探る実践研究を進める。
- 自身の学習過程を省察し、**学校・大学・教育委員会を結んで、不断に発展させる協働学習サイクル**を実現する。

こうした構成を踏まえ、「教職大学院における以下のような学校拠点省察的実践サイクルのデザイン・編成を提案しています。

教職大学院:学びを支える力を培い・協働改革の組織をつくる学校拠点省察的実践サイクル:直面する課題への校内の協働実践・研修の展開を支える実践研究サイクルの実現

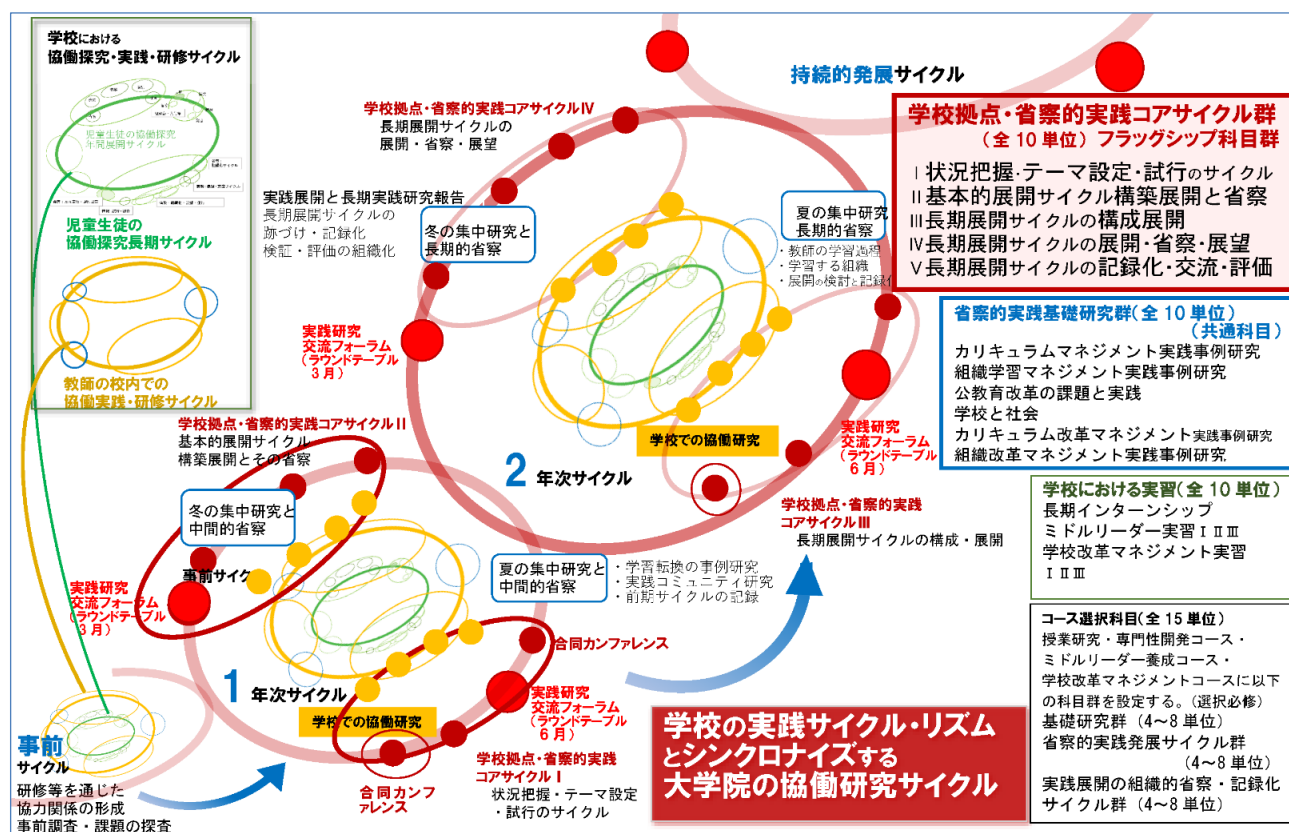
省察的実践サイクルの構成

- **主題:** 学校が直面する改革の課題
 - **アプローチ:** 実践と研究の往還サイクル
学校拠点の実践の組織・展開・省察と課題・組織をめぐる研究とを結びつける。
 - **支援:** 関連分野の協働チームによる支援
関連する複数の研究者・実務家教員がチームで学校での取組に伴走するとともに、合同セッション・集中研究を組織。
 - **組織:** 実践交流の組織とネットワーク
 - **評価:** 実践長期展開の記録と評価の組織
- 培うべき力: 学びを支援する力・学びの変容を実現する組織マネジメントの実践力**
- 児童生徒主体の学びを支援する力
ファシリテーション・コーディネーション・「見とり」・デザイン・学習マネジメント
 - 組織改革マネジメントの実践力
課題解決の力・協働実践の組織力・協働研修支援のファシリテーション・コーディネーション力・ICT・DXの活用力

「主体的・対話的で深い学び」の実現、GIGAスクール、障害のある児童生徒も含め多様なニーズを持つ子どもたちの学習支援、少子化にともなう学校統合、さらに若手の育成、地域社会との連携といった現実の課題に向けて、学校における教師の協働の取組の展開とそれを支える研修を含む支援の組織化が求められている。しかし多くの場合、学校での取組は、①課題をめぐる情報や事例の検討、②取組の効果的編成と展開をめぐる知見や経験、多様なステークホルダーとの関係づくり、③取組の評価をめぐる配備等、取組展開に必要な多様な情報とそのための学習の支えなしに進められている。課題検討から展開・評価に至る一連のサイクルに、関連する多様な専門家・研究者が協働して伴走し、展開に即して効果的な学習・研究と事例交流を組織していくことができるなら、学校での実践がそれを支える効果的な研修・研究基盤を持つこととなり、さらには取組の実地の経験・省察と相互的・協働的な事例研究

を通して実践力[学校での協働の実践と研究のコーディネーション・マネジメントする力]を培うことが可能となる。

従来の大学院では、学校から切り離された場で、大学の時程・年サイクルに従って講義・演習が進められてきたが、学校拠点実践研究サイクルでは大学教員が学校に出向き取組の展開と研究協議に参画するとともに、各学校の取組の中心的教員である院生が、土曜や休業時に集中的に大学院に集まり、課題および取組の展開・コーディネーション・マネジメントをめぐる協働研究セッションを重ね、学校での取組を発展させていくサイクルを実現していく。実践の長期的な積み重ねに即して、実践研究も複数年にわたり発展的に重ね、修了後もラウンドテーブル等の公開研究集会を通して継続的な交流・発展につなげる。



学校における学習者の協働探究サイクルを中心に据え、それを支える先生方の協働研究・研修サイクルが展開し、教職大学院における実践の省察・交流・深化を通して学校での二重の探究の持続的発展の可能性をひらいていく。上記の図はそうした多重の探究の連動した展開を描こうとしています。

「構想」の後半では、これまでの連合教職大学院の取り組みの展開、そしてこうした取り組みをより広く共有していくための新たな組織・ネットワークづくりの展望が記されています。できましたら、本文を参照いただければ幸いです。

https://www.mext.go.jp/content/20220308-mxt_kyoikujinzai02-000020776_23.pdf

追記：2022 年春の世界の現実、国際的秩序が大きく揺らぐ状況の中で、この問題と私たちの「公教育」への企図との内在的な関わりをめぐる問いに触れるべきではないかという思いにかられています。しかしこの問いを進めるためには、いくつもの問題群を縦断する探究が求められることになります。平和のための国際法秩序の基盤となる各国における公法秩序、その法の正統性の根源としての社会契約とその前提となる当事者の自律的な判断力・引責能力、さらにはその力の形成をすべての構成員に保障するための公教育実現への要請にいたる一連の連関への問いは、近代公教育の理念、そして現在の教育改革において求められている力と学びの意味のより深い問い返しを迫るものとならざるを得ません。時間をかけて正面から取り組むべきことと思ひ定めることといたしました。ここではその問いを深めるために、拠り所となると思われるいくつかのテキストを記すにとどめます。

(紙面の都合上、紹介されているテキストは、巻末に掲載しています。)



スタッフ自己紹介

福井大学連合教職大学院 教授 小林 真由美



この春に 38 年間の
教員生活に定年を迎え、
4 月から教職大学院に
勤務することになりました
小林真由美です。

3 月まで拠点校である至民中学校の校長を務めておりまして、在任中は教職大学院の皆様にも大変お世話になり、ありがとうございました。私は 9 年前にもこの教職大学院に准教授という立場で赴任させていただき、それから 3 年間でここを過ごしました。懐かしいスタッフの皆様にお会いできてとても嬉しいのですが、6 年の年月は大きな変化をもたらしており、新たな教職大学院の姿に戸惑うばかりです。

まず驚いたのは、規模の拡大です。ちょうど私が教職大学院を去るときに、連合教職開発研究科に変わったところでしたので、拠点校連携校ともにずいぶん数も範囲も広がりを見せ、国内でも宮古島まで、さらには世界的な結びつきも強くなっていました。院生の数も増えましたし、それにともなってスタッフも多くなりました。組織が拡大していくことは、学びが広がる楽しみもありますが、一方でそれを運営していくことの責任も感じました。

もう一つは、オンライン化が進んだことです。コロナ禍でどこの組織もこのような対策をとっているのだと思いますが、様々な会議がオンラインで行われるようになり、忙しい大学の先生方や遠隔地の先生方のことを思うと、合理的で素晴らしい仕組みだと感心しました。一方で、顔をつきあわせて悶々と考え込んだり、侃々諤々と意見を交わしていたりしていた以前の会議を思い出すと、ちょっと寂しい気もしました。そういえば、学校でも校外の会議はオン

ラインで行われることは増えてきましたが、校内の会議は、どの会議でも昔ながらの対面です。感染症に伴う学級閉鎖等では、オンライン授業も実施しましたが、それはやはり応急処置に過ぎなくて、深い学びにはつながりにくいものでした。もちろん、学びの場と連絡の場は違いますし、年齢的な向き不向きもあるのかもしれません。それでも 4 月 2 日の開講式では、久しぶりのグループディスカッションを体験できました。年齢も立場もそして住む場所も様々な先生方が、初対面だというのに、お互いがもっていた課題をスパークさせて、新たな学びを生み出す・・・このすてきな感覚が蘇ってきて、わくわくしました。ファシリテータのはずなのに、思わず私も一緒になって、楽しく語り合ってしまった。変わったこともあるけれど、変わらないこの感覚、またこれを体験していけることがとても楽しみです。

一方で、この間に教職大学院が大きく変化したように、私自身もこの 6 年間で変わってきたのでしょうか。6 年前、教職大学院の後には小学校で教頭となり、その後、学校教育課長として福井市教育委員会勤務しました。課長という立場で校長先生方と関わる中で、管理職の責務の大きさ、そしてそのやりがいと改めて知ることができました。そして、教員生活最後の 3 年間は至民中学校の校長として学校づくりに取り組みました。この 3 年間は私にとって、38 年間の教員生活の集大成でもありました。特に、最後の 2 年間はコロナ禍に見舞われ、辛いことも悔しかったこともたくさんありましたが、子どもたちから寄せられた「できないと嘆くのではなく、この状況だからこそできることを見つけていこう」という常に前向きな言葉に、大きな感銘を受けました。突然の修学旅行中止の際には「修学旅行のような一時だけの大きな

幸せも大事だけれど、僕たちはこの状況の中で、改めて日常という小さな幸せに喜びを見つけました」という手紙をもらい涙が出ました。「学校を創ろう」と意気込んでいた私でしたが、むしろ子どもたちから学ぶことの多い3年間でした。

今、改めてこの教職大学院に戻ってきて、こうした様々な経験をもう一度、自分なりに編み直してい

たいと思っています。感染症のみならず、戦争、天変地異・・・明日は何が起こるかわからない今、教育もまた、大きな変革の時を迎えています。その新たな時代の担い手となる子どもたちを、また違った形で皆様と一緒に支えていけたらと思っています。今日からの1日1日、皆様にとっても私にとっても、学び多き日々となるよう、ともに頑張っていきましょう。どうぞよろしくお願いします。



福井大学連合教職大学院 准教授 森田 史生

今年度より教職大学院のスタッフとしてお世話になります森田と申します。3月まで福井市内の小学校教頭をしていました。専門教

科は社会科です。教職大学院にスタッフとして携わるのは3度目になります。どうぞよろしくお願いいたします。

自分の約30年間の教員人生を振り返ってみますと、様々な環境で仕事をさせてもらってきたなと思います。新採用から10年間は小学校に勤務し、その後、福井市教委の派遣社会教育主事として学校教育から離れ社会教育を担当しました。そこでは、地域教育の場である公民館を中心にした社会教育の推進、公民館主事の研修などが主な仕事でしたが、この仕事を通して、それまでは学校が教育の中心であると思っていた考えが大きく変わり、学校教育が終わっても一生学んでいく生涯学習の重要性を認識し、その生涯学習につながる学びを学校で展開していくのが学校教育の担う役割の一つであると考えさせられました。

そして現場復帰は中学校という、また新たな環境でのスタートとなり、教科の専門性についても一から勉強のし直しでしたが、部活動、生徒指導、進学指

導などを経験し、小中を見通した繋がりのある学びの大切さを考えることができた時期でした。

4年間の中学校教員生活を経て、心機一転、インド最大の商業都市であるムンバイの「ボンベイ日本人学校」にて在外派遣教員として3年間、日本では経験できない体験を数多くしてきました。日本人として、社会科教員として、国外から見る日本・外国で感じる日本を体感し、厳しい環境の中で生活する日本企業の子ども達が日本と同じような教育が受けられるよう努めてきました。この海外生活の中で、国際社会で活躍する日本人の必要性や、広い視野を持つ日本人を育てる教育の必然性を肌で感じる事ができました。この経験は少なからず自分の人生観を変え、教員として子どもたちに教えるときの意識や視点、話す言葉も変わる大きな転機となった経験です。

帰国後は福井大学附属中学校で8年間勤務し、授業実践研究を中心に取り組んできました。この附属中赴任1年目に、授業観を180°変えなければいけない衝撃に出会うことになりました。それまでもわりと楽しく面白い授業を実践してきましたが、子ども達からその授業ではダメだと突きつけられ、これまでやってきたことが打ち砕かれたのです。授業観の転換は簡単にできるものではなく、そこから試行錯誤の始まりでしたが、授業づくりの醍醐味を味わいながら日々奮闘する中でロングスパンの協働探究の

学びの楽しさを感じられるようになっていました。後半は研究主任、教職大学院スタッフを務め、学校全体の授業実践研究をマネジメントしながら、探究の学びのカリキュラムの創造や子どもも教員も共に探究し、学び続ける学校づくりに取り組んできました。

この附属中の経験を生かせたのが次の勤務地である福井県教育総合研究所教職研修課での勤務でした。初任者から管理職研修までの教員研修を企画運営する部署で、教員の資質・能力を系統的に培っていくために研修体系を構築し、主体的な研修になるよう常に省察しながら学び続ける教員の育成に携わってき

ました。また、教職大学院のスタッフとして参画させていただき、教職大学院の先生方と協働して学校現場の実践につながる研修プログラムを構築し実践してきました。

そして、昨年度教頭として学校運営のマネジメントに取り組み、管理職のやりがいも感じられました。

教職大学院では今までの多様な経験を生かしながら、これからの教員研修のあり方や教員の資質能力の向上、学校内でのマネジメント意識の向上と授業改革、校内研修の活性化などに協働探究しながら取り組んでいきたいと思っています。



院生自己紹介

今号から数回にわたって新しい院生の自己紹介を掲載していきます。初回は、授業研究・教職専門性開発コースの13名です。

大畑 颯人 おおはた はやと

初めまして。今年度から福井大学連合教職大学院に入学しました大畑颯人です。所属は授業研究・教職専門性開発コースの授業研究専門性開発アプローチ（4系）です。出身は福井市で、昨年度までは福井大学教育学部中等教育コースに所属し、中学校一種（理科）、高等学校一種（理科）、小学校一種の3つの免許を取得しました。理科の中での専門分野は地球科学で、特に岩石（火成岩）に興味があります。「球技は苦手だけど、男だしやっぱり運動部に入りたい」という単純な動機で中学から陸上を始めて、現在も趣味程度に身体を動かしています。中学時の顧問に走幅跳を勧められ、自分の向き・不向きを見出されたことによって、成績とともに自分の人間性もプラスに変わっていったことが、自分にとって最初の教師という職へのあこがれでした。また、幼稚園年長時から

“ボーイスカウト”（主に野外活動を通して心身ともに健全な人材を育成することを目的とする世界的な青少年教育運動：以上ボーイスカウト日本連盟 HP 引用）に所属していて、高校時に最高位の富士章を取得、現在はビーバー部門（小学1,2年相当）、ボーイ部門（小学6年～中学3年相当）の指導者として活動をしています。学校外での活動であることと根本は教育活動であることから学校との相違点が多々あり、学校で活かせることは？逆にボーイスカウトで活かせることは？と相互の教育について考えることはとても面白いです。

私の学部生活では、よく「考える」活動をしたなと思います。福井大学の「探求ネットワーク（学生がブロックに分かれて、月に2回ほどの小中学生との活動を通して、企画力や運営力を養っていく活動）」で

は、主に実験を通して子ども達と関わる「ひらめき☆理科ぶろっく」で3年間活動を行い、子ども達の抱く疑問との向き合い方や、子ども達が主体的に活動に取り組める方法について考えました。特にブロックのリーダーを務めた3年目は、ちょうど“コロナ初年度”となり、活動をどのように行っていくのか、自ブロックの1年目・2年目が探求ネットワークで学ぶべきことを学べる環境を3年目としてどのように確保するかなど、子ども達にとっての教育、スタッフにとっての教育、自分にとっての教育…と広く教育について考えた1年でした。大学での授業や教育実習における理科の授業研究においては、「疑問との向き合い方」を特に意識し、生徒の疑問に基づいて探究的な思考が展開されていく理科授業の実現を目指してきました。様々なことを全力で考えた4年間でしたが、4年間を終えて思ったことは、「時間が足りない！もっと時間がほしい！」というものでした。

私が教職大学院への進学を決めたのは、①教育現場を様々な視点から捉え考える機会がほしい、②教科の専門性を高め授業・生徒とのかかわり方の引き出しをたくさん作りたい、③自身も研究活動を継続し科学を拓く一員としての経験を積みたい、といった3つの理由からです。もう教師としてやりながらもいいんじゃないか？という声が聞こえてきそうですが、私はそこまで要領がよくないので多忙化が囁かれる現在の教育現場で上記の3つをやり抜く自信を持てません。教職大学院という学校現場に限りなく近い一步離れたところで、自分の興味・関心に向き合い素地を固めてから現場に出たいという思いが

強いのです。私にとって教職大学院への進学は、自分の興味・関心を大切に守るの一手であり、かつ2年間本気で教育と向き合うという攻めの一手でもあると捉えています。

私の専門である理科は、生徒の到達すべきゴールと生徒が認識しているゴールに乖離が生じています。私はこの3月まで塾講師として主に中学生の指導をしてきましたが、その中で「理科」という教科は「暗記の教科」という認識が根強く残ってしまっていると感じていました。つまり理科用語の暗記が生徒にとってのゴールになってしまっているのです。一方、理科が目指すべきゴールは生徒の科学的思考力を養っていくことです。科学的思考力というと難しく聞こえますが、簡単に言えば「なんで？って思える、なんで？に向き合える」力だと思っています。理科の用語はそんな疑問を進めていくうえでのツールのようなものでしょう。そして理科のフィールドである“科学”には、なんで？って思える「不思議」があふれています。私は、そんな科学の面白さを生徒に実感させ、楽しんでいるうちに科学的思考力が養われているような「おもしろい授業（三好先生の言葉を引用）」ができる教師になりたいです。

ここまで述べてきたように、様々な興味を持つ一方「すぐ無理をすること」が私の短所です。大学・大学院の先生方や、インターンシップ先の先生方にはその無理から、ご迷惑をおかけすること、また相談することも多いかと思います。その際は、お力添えいただけると幸いです。これから2年間どうぞよろしくお願いいたします。

加福 智哉 かぶく ともや

初めまして。今年度より授業研究・教職専門性開発コースに入学いたします加福智哉と申します。昨年度までは、静岡大学教育学部初等学習開発学専攻に所属しておりました。取得免許は、小学校一種、中学校一種（社会）、高等学校一種（地理歴史）です。

大学生の時は、新学習指導要領に対応した学びはどのようなものなのかについて主に学んできました。例えば、アクティブ・ラーニングを取り入れた授業です。新学習指導要領に書かれた資質・能力を育むために、座学だけでなくアクティブ・ラーニングを取り入れた学びを行っていく必要性を学び、育みたい資質・

能力に対して、どのような活動を取り入れていくとよいのかを考え、提案することを行ってきました。そして、それを全体で評価し、改善していく取り組みも行ってきました。アクティブ・ラーニングの活動の中でも、特にジグソー法について多く学んできました。ジグソー法とはどのような方法なのか、どのような場面で取り入れると効果的なのかを実際に資料を作り、ジグソー法を用いた模擬授業をグループで試してみる活動も行ってきました。他にも、教科横断的な学びを行うために、総合的な学習の時間の年間計画を立て、いろいろな教科を取り入れた教材開発に努めてきました。その中では最終目標を立て、提案する活動を行ったり、今言われているSDGsについて考え、SDGsにつながる授業や活動はどのようなものかについて考えたりしてきました。教育実習はコロナの影響もあり、中学校1週間、小学校1週間の計2週間しかありませんでしたが、実際の子どもの反応や学校現場を知るととてもいい経験になりました。実際に授業は小学校で1回だけ行い、3年生の算数の授業を行いました。これまで大学で習ったようなことを意識し、アクティブ・ラーニングを取り入れようと工夫しながら授業づくりをしました。

学校での長期インターンシップでの目標は、大学生時に学んだことや考えてきたことを生かした実践を行い、大学の座学やグループワークで培ってきたものが実際の現場でどのようなものになるのかを知り、工夫・改善を行う中で、主体的・対話的で深い学びにつながる授業づくりができるようになることです。また大学生時には、学生を相手にした模擬授業しか行っていないため、実際の子どもの反応はどうか、子どもを相手にするとどのような学びになっていくのかといった実践的な授業力を身に付けたいです。それと同時に、私が卒業研究で考えてきた学校・学級づくりについても、実習や現場での経験をしていく中で、考え方にさらに磨きをかけ、生徒指導力や教育課題への対応力も身に付けたいです。このように実践的な学びと理論の往還的な学びを行いながら、質の高さだけではなく幅広さも含めて教員になるために必要な力を身に付けたいです。そして、長期のインターンシップを通して、自分自身の専門性を高めていくために、他の先生方の授業観察なども行っていきます。これから2年間よろしく願いいたします。

小林 歩実 こばやし あゆみ

初めまして。今年度より授業研究・教職専門性開発コースに入学しました、小林歩実です。福井大学教職大学院M1の美術科に所属しています。福井県出身で、昨年までは、福井大学教育学部学校教育課程初等教育コースに所属し、美術を専攻して学んできました。取得免許は、小学校1種、中学校1種（美術）、高校1種（美術）です。

私は小さなときから絵を描くことが好きで、暇さえあれば絵を描いていました。特にいきものを描くことが好きで、図書館に行って図鑑を借りてきて、それを見ながら描いたり、実際に動物園や、庭に出て観察しながら描いたりしていました。また、手先が器用になってくると、紙を使って工作をするなど、ずっと手を動かし続けてきました。これらのことは、誰かに

作るように、手を動かすように言われたり、指示を受けたりしたわけではなく、いきものや絵を描くこと、工作をすることが好きだったため、大学院生になった今でも作り続けています。何かを学ぶ、研究するにあたり、一つのことを好きであり続けることは、とても大切であると思います。好きでなければ、物事に興味をもって、学びたいという気持ちにならないからです。これから美術に触れる人たちが、何かを作ること、見ることを好きになるきっかけを作っていけるように、まずは自分自身が制作する、そして美術を楽しむことを忘れずに、環境やきっかけを作っていきたいです。

また、大学の卒業制作では、「共生と矛盾から生じるアイロニーを主題とした立体表現」を研究しまし

た。前述しましたが、私は小さなときからいきものが好きで、庭に入ってはそれを観察したり、手で触れたりなど親しみをもってきました。そして、その生態や姿形の面白さ等の知識を増やしていくことで、モチーフとしての可能性を感じ、それをテーマに作品を制作、研究しました。生活していくにあたり、私たちは何かしらの集団に属して生きていきます。そして、その集団が大きくなればなるほど、制約やしがらみが増えていきます。生きていくにあたり、建前や妥協、表層と本質のずれ、理想に追いつかない現実とぶつかることが多くあると思います。社会という大きな集団と向き合っていくうえで、この疑問や思いを昇華してくために、1年間研究、作品制作に取り組みました。不都合なことや、嫌なことなどは見ないふりをするのが一番簡単だと思います。しかしこれから先、たくさんの人と関わっていくにあたり、それだけではなく、どのように関わっていくのか、どのような選択をするのかを考え、決めていかなければならなくなってきました。これから、インターンシップでたくさんの先生や子どもたちと触れ合い、考え、学んでいくためにもこれらは大きな課題であり、向き合っていかなければならないと考えています。自分がどのように社会、現実に向き合っていくか、考えていくうえでの軸になるものを作っていくためにも、この1年間だけで終わらずに、しっかりと制作を続けていきたいと思っています。

作品を制作していくにあたり、指導教員の先生、作品を見てくれた人と言葉を重ねていくことで、自身がなぜそこに興味をもつのか、自分が気付いていなかった作品に対する思いに気付くことができました。作品は作るだけではなく、展示をして発表をする機会を設けなくてはならないと考えています。自分の

中だけにとどめていたら、その作品が持つ本質や、自分が気付いていない思想、物事にどのように向き合っているかなどの姿勢に気付くことが出来ないからです。これから先2年間の間に、積極的に手を動かして、形にしていけるように思考を重ねていきたいと思っています。

より新鮮な学びを確かな言葉にし、説得力のある授業を行っていくには、まず自分が当事者であり、作り手であり続けなければならないと考えています。より良い学びを、教材を研究していくためにもしっかりと自分の研究制作に真摯に向き合い、手を動かしたいと思っています。

人間関係を築いていくことが苦手で、積極的に人と関わり発言することが苦手であった学生時代に、私は美術の時間にたくさん助けられ、励まされてきました。人前に出ることが苦手であったとしても、美術の時間だからこそ積極的に活動ができ、力を発揮できる子どもたちが多くいると思います。そのような子どもたちの大切な時間になるように、美術の時間が苦手な子どもたちでも、自分が何をしたいのか、自分なりの表現を見つけ、自分なりの価値観を見つけていけるような環境を作って行けるように頑張っていきたいと思っています。これからの2年間をより充実したものにしていくためにも、自身の研究、制作に励み、よりよい教材研究につなげていきたいと思っています。美術という時間が新しい価値観との出会いになるように、そして楽しく充実した時間が過ごせるように人との出会いを大切に、自分ができることを精一杯頑張っていきたいと思っています。短い時間ではありますが、これから関わる方々、インターンや大学の先生方、2年間どうぞよろしくお願いいたします。

酒井 俊典 さかい としのり

はじめまして、この度福井大学連合教職開発研究科教職開発専攻の授業研究・教職専門性開発コースに入学いたしました、酒井俊典と申します。昨年の3月までは福井大学の工学部・応用物理学科に所属し

ていました。中学から大学まで、ハンドボールをやってきました。学部時代に取得した免許は高校一種(理科)ですが、新たに教員免許取得プログラムで中高数学の免許を取得する予定です。

高校で自分のなりたい職業が分からず進路に迷ってしまった時に自分の得意なことや分野を活かした職業を考えてみました。そうすると、他の人に何かを説明したりプレゼンテーションしたりすることが比較的得意であることに気づき、自分の得意科目を伝える人になりたいと思ったのが最初に教師を志した瞬間でした。

今になって高校生の自分を振り返ると知識伝達型の授業を淡々と受動的に受講し、テスト直前になるまで疑問点を放置してしまい、一夜漬けのテスト期間を送っていたダメな生徒でした。同時に、それまでは感じることもなかった勉強への抵抗感もこのころが一番強かったです。

この時期に対して、大学に入学してからの自分はテスト勉強こそ大変だったものの勉強に対する抵抗感は非常に小さかったように感じます。この違いを生んだのは講義に向き合う姿勢であったと思います。学部時代の授業では、より専門的な物理学に触れたことにより物理公式の意味や物理公式と実際の物理現象の関連性について高校時代よりもはるかにしっかりと学ぶことができました。これにより今までもやややしていた部分がクリアになって、初めて物理の面白さに気づくことができました。面白さが分かると不思議なもので知識がどんどん入ってきて、勉強に対して能動的になり、さらに知的好奇心が湧くという良い循環が生まれていました。この体験から高校生にも数学、物理の面白さを知って少しでも

興味をもってほしい、また、その興味のキッカケとなる先生になりたいと強く思うようになりました。

面白さが分かったのも、専門性の高い学びと数学と物理の関係性を知れたからこそだと思ったため、数学の専門性を高めるべく今年の卒業研究ではコンパスと目盛りのない定木のみを用いた作図問題(幾何学)について体論の視点からの理論を研究してきました。また、力学の授業では微分積分の分野を道具として使うので、使っているうちに高校時代よりも微分積分を深く理解することができました。これらの学びを踏まえた物理学という新たな視点の獲得で世の中の物理現象と数学の密接な関係性に気づくことができ、さらにこの視点を教科指導にも活かしたいと思うようになりました。

教職大学院では長期インターンシップを通じて、より学校教育に近づいた数学の専門性を高めると共に、現職の先生方の授業から良いところを取り入れて自分の糧にしていきたいと思っています。また、工学部での経験を活かして物理的な視点を数学の授業で用いた、教科横断的な授業を研究・実践していきたいと思っています。また、校務分掌などの教育実習では体験しなかった教師の裏方の仕事にも挑戦したいと思っています。

教育学部のことは右も左もわからない新人ですが、自らの専門性を活かして精一杯がんばりたいと思います。よろしくお願いいたします。

酒井 夏瑞 さかい なつみ

職大学院に進学した理由、今後の展望の3点について紹介します。

私が所属していた現代社会学部社会システム学科は、経済、政治、国際関係、観光など社会のあらゆる課題を学ぶことができる学部でした。数えきれないほどの社会問題がある中で、私が特に関心を持ったのはジェンダー論でした。ジェンダーの視点は経済や政治などの様々な分野で取り入れられています。

はじめまして。福井大学連合教職大学院授業研究・教職専門性開発コース1年の酒井夏瑞と申します。昨年3月まで、同志社女子大学現代社会学部社会システム学科ライフデザインコースに所属していました。現在、中学校一種(社会)、高等学校一種(地歴・公民)の教員免許を取得しています。今年度から3年間の免許取得プログラムを受け、小学校一種の免許を取得する予定です。ここでは、大学時代の学び、教

私は元々関心のあった教育分野のジェンダーギャップに着目し、研究を行ってきました。卒業論文では高等学校公民科「現代社会」の教科書をジェンダーの視点から分析し、高校生に対するジェンダー教育のあり方について考察しました。この研究を通して、教員として多種多様な子どもたちと関わる際に活かすことのできる新たな視点を得ることができたと考えています。また、教科書の内容をただ教えるのではなく、子どもの好奇心や興味を引き出しながら、それを伸ばしていくことのできる教育の重要性に気づくことができました。学業以外ではよさこいを通して沢山の仲間たちと関わりました。また、3回生の時に学生支援ボランティアに参加し、中学校の特別支援学級で過ごす子どもたちへの学習支援を行いました。

教職大学院に進学した理由は2つあります。1つ目は、長期インターンシップを通して子ども一人ひとりの個性と学級全体の特色を活かした学級経営や指導・支援ができる能力を身に付けたいと考えたからです。年間を通して子どもたちと関わることで、生徒指導や学級経営の面で子どもに対する支援・指導がどのような影響を与えているのかということを知ることができると思いました。拠点校の先生方と長期

的に学級の課題を共有しながら子どもたちと関わっていきたいと思います。2つ目は、大学でジェンダー論や人権的多様性について学習したことで、教育の重要性に気づき、さらに研究したいと考えたからです。大学2回生までは教員を目指す明確な理由がなく、教員免許だけ取得しておこう、と考えていました。しかし、ジェンダー論や人権的多様性について学習したことで、自己肯定感を高めるために生徒一人ひとりの可能性を引き出す教育の重要性に気づきました。3年間実践を繰り返して授業や自身の行動を改善していきたいです。

これから3年間はジェンダーの視点からではなく教育学部の視点から教育を学べるので楽しみです。カンファレンスなどで先輩や現職の先生方の意見やアドバイスを参考にしながら、教育における課題について自分なりに考えていきます。また、大学での学びを活かし子どもたちの成長を踏まえた授業や指導・支援ができる教員になるために3年間、積極的に行動していきます。沢山の方々の支えに感謝しながら、その感謝の気持ちを子どもたちの教育につなげられるよう努力していきます。3年間、宜しくお願い致します。

多田 朋生 ただ ともし

はじめまして。本年度から福井大学連合教職大学院に入学しました1年生の多田朋生と申します。授業研究・教職専門性開発コースに所属することとなりました。昨年度まで福井大学教育学部学校教育課程中等教育コース理数・生活教育サブコース（理科専攻）に在籍していました。取得免許は小学校一種、中学校一種（理科）、高等学校一種（理科）です。趣味は様々な生き物について調べることに、いろんなジャンルの漫画を読むこと、またこれから魚釣りや野外で料理を作って楽しむこと等についてチャレンジしていきたいと思っています。

教育学部では理科教育について専攻しました。理科教育以外には、「探求ネットワーク」という地域の

小中学生と一緒に様々な活動を行う取り組みや、「ライフパートナー」という学校現場に行き支援が必要な子どもとマンツーマンで物事に取り組み学習支援を行う活動、福井大学附属義務教育学校での教育実習を行いました。理科教育を専攻していく中で、学校現場では子ども達の理科離れが進んでいること、理科の授業を行う上では発問が重要であり、子ども達が自ら答えを出すことができるようなアプローチを図っていくことが重要であることを学びました。またこれからの理科教育では、子ども達に自らの生活の中に潜んでいる科学について気づかせることが重要となってくることに気付くことができました。私自身身の回りの科学について調べ、学んでいくこ

とは好きであったので、身の回りの科学を大切にしたい学びを与えることができるような授業を行いたいと考えるようになりました。「探求ネットワーク」や「ライフパートナー」活動、教育実習では実際に子ども達と関わることの困難さ、子ども達が活動についてどのような意識をもって取り組んでいくのかを見取ることの重要性、自分が思い描いていた授業を実際に行うことの困難さについて、子ども達と共に活動することや、実際に子ども達に授業を行うことで学ぶことができました。実際に子ども達と関わる活動を通して、活動や授業中に子ども達の個性や授業内での発見や疑問について見取る力、授業のやり方、その授業内でどこを重要視しどのように授業を構成していくのかについて考える力等、未熟な部分が目立ち自分自身の教員としての能力のなさを痛感しました。理科教育について実際の学校現場ではどのような学習が行われているのかをもっと知りたい、自分の教員としての技術、子ども達との関わり方についてもっと学びたいと思い、福井大学の教職大学院に進学することを決めました。

教職大学院では教育学部で学んできた学校教育についてさらに学習していきたいと考えています。教職大学院の長期インターンシップでは、実際に学校現場で行われている授業について知り、多くの先生方の授業を参観することで、様々な授業方法、授業で大切にしている部分はどこなのかについて、多様な考え方を知り、自分の考える授業の中に取り込んでいきたいです。自分の専門である理科教育については、子ども達に理科への興味を持たせることができるような学習教材の開発を行いたいと考えています。そのためには自分自身の理科の専門性をより高めていくことが必要です。教職大学院の2年間で理科教育についてより多くのことを知り、学校のカリキュ

ラムに含まれている理科の内容だけでなく、カリキュラムに関連することのできるような、学校では習わない理科についても多く触れていこうと思います。また授業だけではなく一教師として学校現場で働くことで、教員という職業についてより深く学び、子ども達との関わり方についても様々なことを勉強していきたいです。また教職大学院でも多くの授業実践について検討することで、教育の在り方について学び、学んだことを教職大学院の先生方、大学院生の仲間たちと共有することで、様々な考え方に触れ、教育について多くの引き出しを自分の中に作っていききたいと思います。

私は理科教員を目指しています。しかし、理科の問題を解くことはとても苦手です。けれども、学校では習わないような生き物について調べたり、自然で起きている現象についてなぜ起こるのかを考えたりしていくことは好きです。問題を解くことが苦手というのは短所ではありますが、理科について苦手意識を持っている子ども達の気持ちをわかることができるという長所であると考えています。また学校では習わないような物事について興味があることは自分の良いところであると思います。将来教員となって学校現場で理科を子ども達に教える際には、教科書にあるような既存の内容について教えていくことはもちろん、子ども達が普段の授業では学ぶことができないような理科の内容についても教えていきたいと考えています。そうは言っても子ども達に教えないければならない内容について教えることができないというのでは良くないので、教えないければならない部分についてはより勉強して、人に教えることができるようになりたいと思います。自分の考える理想の教員となることができるように2年間頑張らせていただきます。

富田 一葵 とみた いつき

初めまして。この度、福井大学連合教職大学院の授業研究・教職専門性コースに入学しました富田一葵です。福井県出身ではありますが、昨年度までは山口

大学教育学部情報教育コースに所属していました。そこで小学校1種、中学校1種（数学）、高等学校1種（数学）（情報）の教育免許を取得しました。

趣味は弓道を高校のときから続けており、現在も昇段審査に向けて日々努力しています。また大学の講義でプログラミングに嵌りました。昨年からの配管工の兄弟で有名な会社が開発したプログラミングソフトで簡単なゲームを作ることに邁進してきました。この教材は動画サイト等でも紹介されており、全国の“先生方”のお手並みを拝見させていただき、私自身も勉強し、プログラミング三昧の生活を過ごしておりました。

学部での4年間で教科「情報」を中心に学んできました。「情報」は2020年の3月から日本でも流行した新型コロナウイルス感染症の影響を最も強く受けた教科であると考えています。2018年に教育振興計画などで超スマート社会(Society5.0)の到来に向けた学習や能力の向上が求められていました。しかし、当時の「社会と情報」ではこれからの「情報I」などにおけるプログラミングやコンテンツの制作、AIについて考えを巡らせることを求められていませんでした。この数年間にZoomによるオンライン授業やiPhoneやタブレットの普及とICTを日常的に活用することが当たり前になり、教える側の自分たちにもそれ相応の知識や能力が求められるようになりまし

た。特に迷惑メールに引っかかった時や振り込みを求めるURLへの対処まで任せられたことは今でも「情報」のおかげであると思っています。

また、感染症の影響は教科のみならず、自分たち学生にも及びました。例えば、2020年の3月に流行した際、当時大学3年生の自分たちは初の長期的な教育実習を控えていました。ですが、実習先の学校の状況や大学生内での感染状況等により、代替措置を取ることや教育実習先の減少による実習日の短期化、実習内容の削減に遭いました。特にSHや授業見学、授業すらもZoomで行ったことが印象的でした。

大学院では学部の時にはできなかった教育実習のリベンジを果たすとともに教育実習以上の現場での雰囲気や校務に少しでも係わっていきたくて考えています。私自身の授業構想力、指導技術の向上を目指し、2年間学べるこの貴重な機会と環境を無駄にすることなく、実りある大学院生活に臨んでいきたいです。

最後になりますが、これからお世話になる福井大学ならびに教職大学院の先生方、インターンシップ先の学校の先生方、教職大学院の先輩方、同期のみなさん、これからどうぞよろしくお願い致します。

中村 七海 なかむら ななみ

はじめまして。今年度より福井大学連合教職大学院の授業研究・教職開発専門性コースに入学しました中村七海です。昨年度までは福井大学教育学部初等教育コース特別支援教育サブコースに所属し、小学校教員を目指しながらも特別支援教育を専門に学んできました。さらに専門教科として数学を専攻して学んできました。取得免許は小学校一種、特別支援学校一種(知的・病弱・肢体不自由)、中学校一種(数学)、高等学校一種(数学)です。学外では児童館支援員、高校男子バドミントン部の外部指導員としても勤務しています。

私は小学校の頃からぶれることなく教員という職業を志してきました。小学校2年生の時の担任教師は次の年に北京の日本人学校へ行くなど、教員となっても学び続ける姿勢、挑戦し続ける姿勢を持っていました。そのような担任教師の姿に影響を受け、自分自身も教員となっても高い目標を持ち、学び続ける教師になりたいと考えるようになりました。

学部では小学校4年生から続けているバドミントン競技と、教員を志し学業に打ち込む4年間を過ごしました。「何でもできる人になりたい」と、あえて自分を追い込むように4校種の免許取得に励んだ4

年間は特別支援教育サブコースや数学科の友人に助けられながら、とても充実した毎日を過ごすことができました。

現在、小学校の通常学級には6.5%程度の発達障害を抱える児童が在籍していると言われています。ライフパートナー活動やCST型のインターンシップなどを通して実際に教育現場へ行くと、6.5%以上の発達障害を抱えた児童やその疑いのある児童が在籍していることを知りました。また、通常学級で困難さを抱えているのは発達障害児だけではありません。日本語指導が必要な児童や性的マイノリティの児童、虐待を受けている児童、愛着障害を抱える児童など様々です。これからの時代、小学校教員にこそ特別支援教育の専門性を身につける必要があると考え、私は小学校教員を目指しながらも、あえて特別支援教育サブコースを選択しました。

私は困難さを抱える児童も周囲の児童も通常学級という同じ学級の中で一年間を過ごす意味が必ずあると考えています。周囲の児童が困難さを抱える児童へ手を差し伸べるという一方向の矢印だけではなく、困難さを抱える児童が周囲の児童へと与える影響がたくさんあり、通常学級の中でのこの双方向の学びが、全ての児童の成長を促していることがわかってきました。また、見本となるような行動が見られた際には「素敵だね」と学級全体の前で褒めたり認めたりすること、配慮が必要な児童に対してはまずは教師自身が許す姿勢を見せることで、周囲の児童も配慮が必要な児童なりにできることをがんばっているということを認められるようになることなど、インクルーシブな通常学級を経営していく上で必要な教師の支援について考えを深めてきました。

大学院では引き続き学業とバドミントン競技との両立に努めます。また、このようなインクルーシブ教

育を小学校の通常学級において実現するために、長期インターンシップでの実践や理論の両側面から学んでいきたいと考えています。

学部では「全ての児童が生き生きと生活ができる学級」を掲げ、その実現に向けて学んできました。大学院でも引き続きこのようなインクルーシブな学級を目指すとともに、このような学級とはどのような学級であるのかをより具体的に、明確にしていきたいと考えています。卒業論文で見えてきたインクルーシブな学級の実現に必要な教師の支援を今度は自分が長期インターンシップの場で実際に行っていきたいです。また、通常学級においても、丁寧に一人一人をアセスメントしていくことで見えてきた支援方法を実践していき、特別支援教育の良さを通常学級の学級経営にも取り入れていきたいです。そして、卒業論文における調査では、焦点を当てることのできなかった性的マイノリティの児童や聴覚障害、視覚障害を抱える児童にも焦点を当て、自分自身も手話や点字を身につけたいと考えています。いずれは聾学校・盲学校教員の免許も取得することで、どのような困難さを抱える児童とも向き合うことができるようになりたいと考えています。

大学院ではこれまで以上にたくさんの人との出会いがあることと思います。出会いには必ず意味があると私は考えています。出会った人たちと真剣に向き合い、意見を聞き入れ自分に良さを取り入れることを大切にしながら意味のある時間を過ごしていきたいです。そして、がむしゃらに泥臭く学ぶ姿勢、挑戦し続ける姿勢を忘れず、常に上を目指して学ぶ2年間にしたいです。

2年後、小学校教員となった際には胸を張って「特別支援教育が専門の小学校教員」と言えるような教員を目指します。

原 智徳 はら ともり

はじめまして。今年度より教職大学院の授業研究・教職専門性開発コースに入学しました原智徳です。

昨年度までは、福井大学教育学部中等教育コース技術科専攻に所属していました。教職大学院では、4系

に所属しており、教科は学部を引き続き技術・家庭科の技術分野です。取得免許は、中学校1種（技術）、小学校1種、高等学校1種（工業）です。

私は、この教職大学院で様々な経験をしたいと思っています。その一つに長期インターンシップがあります。インターンシップでは、実際に学校現場に入り、教員として体験を通じて学ぶことができます。また、実際に教員として働くのとは異なり、週2日間現場で学び、残りの3日間は教科の学習をすることができます。学校現場で教員としての仕事を学び、生徒の実態に合わせた授業や対応を考えることができ、更に実践を行うことができる、この環境は非常に恵まれており、この2年間はとても有意義な時間になるのではないかと思います。これから実際の学校現場で学び、それを基にして教材研究や教員としての役割などを考えていきたいです。

また、インターンシップでは、部活動を担当することができます。私は中学高校と野球をし、大学ではソフトボールをしていました。私が教員を目指すきっかけは部活動を教えたいという思いからでした。インターンシップ先では、希望である野球部を担当させていただけるようなので、自身の経験を踏まえた指導ができるようにしたいです。また、私たちが行ってきた部活動とは異なる部分が多くあると思うので、そのような雰囲気や制度等の違いも学んでいきたいです。

初めまして。この度、福井大学連合教職大学院に入学しました松浦妃南と申します。所属は、授業研究・教職専門性開発コース4系です。福井県出身で、昨年度までは福井大学教育学部学校教育課程中等教育コースに所属し、専門教科として数学を学んできました。音楽を聴いたり演奏したりすることが好きで、中学・高校・大学と吹奏楽部に所属していました。取得免許は、小学校一種、中学校一種（数学）、高等学校一種（数学）です。

次に、私は4系であるため、教科の学習をする時間が設けられています。そのため、技術科を教えるための知識やスキルについて学びたいです。また、教員として教えるだけでなく、技術に関わる情報や知識を深めるとともに、実技のスキルを高めていきたいです。特に、技術に関わる分野は目まぐるしく発展していているため、常に新しい情報を取り入れ、技術科における知識を深めていきたいです。また、私は学部4年のときに「教員養成系大学生を対象とした計測・制御学習用教材の開発」という研究を行っていました。内容としては、3Dプリンタを用いた金属部品の開発とArduinoというマイコンを使用したロボット教材の製作を行いました。この研究では、ロボットは完成したものの、教材としての完成度が十分でなかったり、大学生に向けて実践を行うことができなかったりなど、様々な課題が残りました。そのため、教職大学院の機会を活かして研究を継続していきたいです。

最後に、私は教員になることを目指しています。2年後に教壇に立つという意識をもって、この教職大学院で過ごす2年間に有意義なものにしたいです。教職大学院の先生方、先輩方、同期の皆さん、週間カンファレンスや月間カンファレンス、ラウンドテーブル等お世話になりますが、よろしくお願いいたします。

松浦 妃南 まつうら ひな

私はこれまで、数学の専門的な知識から実践的な内容まで幅広く学んできました。学問数学では、代数学、幾何学、解析学、確率論・統計学といった数学の高度な内容を学び、定義や公理、定理を用いて新たな体系を築いていく過程から数学の美しさを実感することができました。

算数・数学科における現在の日本の教育では、数学の学習に関して諸外国と比べると、学習意欲面で肯定的な回答をする生徒の割合が低く、小学校から中

学校へ移行するにつれてその割合が低下することが課題として挙げられます。数学嫌いである子どもにその理由を聞いてみると、「数学はできないから嫌い。」といったような声をよく聞きます。確かに、問題を解くところできて達成感を得たことにより楽しさを感じている人も多くいると思います。しかし、数学の面白さや学ぶ意味を理解せず、問題が解けなかった経験から意欲を失ってしまったことで数学嫌いになってしまったのならば、改善すべき課題です。この課題を解決するために、私は数学科教師として数学のよさを子どもたちに伝え、子どもたち自身が学びたいと思える授業を行いたいと考えています。

このような思いから、私が興味を持ったのは“数学教育”です。卒業研究では数学教育のゼミへ入り、学習者のつまずきとそれに対する新たな教授法の開発を目指し、研究を進めてきました。大学4年次で行った研究テーマは「中学校段階における証明学習の困難性とその要因」です。証明学習では困難を抱える学習者が多く、古くから研究されており、未だ課題は多く残されています。このような単元を取り上げて、学習者のつまずきの実態を明らかにし、その教授法について提案することは、今後教師になって授業をする際に必ず役に立つと思い、研究を決意しました。卒業研究で初めて研究というものに触れましたが、研究を進めていくうちに、勉強と研究の違いに気づき、研究の楽しさを知ることができました。現状と課題を明確にし、過去の教育の変遷も踏まえ新たな視点から解決策を見いだすというこの流れは、授業研究を行う上でもとても大事な視点です。学習者のつまずきを教師自身が理解し、なぜそのようなつまず

きをしてしまうのかという学習者の認識を明らかにした上で授業作りを行い、その結果、授業中や授業後でどのように学習者の認識が変容したのかを分析することによって、学習者にとっても教師にとってもよりよい学びになると思います。教師の多忙化が指摘される世の中ですが、このように研究しながら学び続けることのできる教師になるため、教育現場に出る前に自分なりの研究の仕方を身に付けたいと思い、教職大学院への進学を決めました。長期インターンシップを通して、学校現場とかかわりながら研究にもしっかりと時間を割くことができるという教職大学院の強みを生かし、2年間で教師として大きく成長できるよう、楽しみながら精一杯学びたいと思います。

また、私は学部時代に取り組んだ探求ネットワークやライフパートナー、教育実習などの経験から、学校生活において子どもとの信頼関係を築くことがなによりも大切であると実感しました。授業をするにしろ、学級でかかわるにしろ、信頼関係が無ければ何事も上手くいきません。インターンシップでは、初めて長期的に子どもたちとかかわることができるため、中学生という大人になろうと様々な壁にぶつかる時期である多様な子どもたちとどのように接していけばよいのかについて、自分なりに試行錯誤しながら考えていきたいと思っています。

この2年間でどんな新しい学びと出会えるのか、とても楽しみです。教職大学院の先生方やインターンシップでお世話になる先生方、子どもたち、他院生から多くのことを吸収し、充実した2年間にしたいです。どうぞよろしくお願いいたします。

三澤 雅充 みさわ まさみつ

はじめまして、今年度より授業研究・教職専門性開発コースでお世話になります。三澤雅充と申します。昨年度までは、岐阜聖徳学園大学教育学部に所属しており、国語科を専修していました。

唐突ではありますが、私には一つの夢があります。それは、「学校に行かない・行けない」子ども達への印象を改善させることです。私自身、高校生の頃に学校へ登校することがあまり好きではなく、不登校と呼ばれる状態になったことがあります。しばらく学校へ行かなかっただけで、クラスの皆が初めて会っ

た他人のように思えたり、担任の先生が自分を見る目が違って感じられたりしたことを今でも鮮明に覚えています。しかし、そんな時であっても、両親や恩師・学校の外で出会った方々が「あなたが自分で考えて決めた行動なのだから」と私の意思を尊重し、背中を押して下さったおかげで、今の私があります。

私自身が不登校を経験したといっても、同じように不登校になっている子ども達の気持ちまで理解できるのかと言われれば、その子にはその子の考えや事情があると考えため、不可能です。また、私自身が不登校になった時期も高校生の頃であるため、同じような状態になった小学生や中学生の子ども達とも精神面での悩みについて同一視することはできないかもしれません。しかし、子ども達一人一人がどんなことを求めているのか、どのような助けがあれば、その子に自立を促すことができるのか一緒に考えることはできると考えています。

現在は全国的に実施されている遠隔授業や情報端末機器などの ICT を用いた授業に対して関心を寄せています。2019 年から流行している新型コロナウイルス感染に対する有効な手立ての一つであり、「学校に行かない・行けない」子ども達への支援を行うことができるのではないかと考えるためです。しかし、これらのことに関しては、課題が多く、私自身まだまだ知識が乏しいため本大学院での 2 年間を通して学んでいきたいと考えています。

また、大学ではフレンドシップとよばれる活動に参加し、私達学生が主体となって様々な遊びを企画・運営し、地域の子供達と触れ合うことを通して、子ども達と接する際に求められる資質や能力を培いました。そのため、これまで培った経験を活かして活動していきたいと思っています。

これから、二年間どうぞよろしくお願いいたします。

八十川 竜馬 やそかわ りょうま

はじめまして。今年度より福井大学連合教職大学院授業研究・教職専門性開発コースに入学する八十川竜馬です。昨年度までは、教育学部学校教育課程の中等教育コースにて理科(地学)を専攻していました。基本的には家でゆっくりすることが好きで、小学校の低学年の頃から何となく教員になりたいと考えはじめ、中学校・高校で理系科目を特に楽しいと思うようになっていきました。その結果、福井大学の教育学部に入学し、数学を専攻することにしていました。しかし入学してすぐの科目別のオリエンテーションにて、幼いころから恐竜や宝石に興味があった私は「地球科学」と運命的な出会いをしてしまいます。すぐに理科を専攻することを決め、2 年次から地学教室のゼミに参加するようになりました。今まで触れてこなかった地学は難しかったものの、科学の面白さに気付かせてもらえました。地学に出会えたこともあり、大学生活の 4 年間は私のかけがえのない経験となり

ました。このように少し変わった私のことを知っていただくべく、大学での学び、現状、そして教職大学院での展望について以下に述べていきます。

まず大学 4 年間で私がどんなことを経験し学んできたのかをお話します。大学では、基本的な講義に加えて、福井大学教育学部の特色でもある探求ネットワークを 1、2 年次に経験しました。またライフパートナー活動を通して、1 年間 1 人の児童を対象に関わったり、3、4 年次には教育実習で中学校と小学校で実践的な活動に取り組んだりしてきました。実際に子どもたちと関わる機会が充実しており、講義だけでは学べない非常に多くのことを学びました。これらのほか、専門の理科に関して、2 年次より理科の講義を履修しつつ、卒業研究、地学教室の野外巡検、科学の祭典などを通して、専門性を高めてきました。卒業研究に関しては、「福井県坂井市三国町に分布する米脇層宿凝灰岩部層の堆積環境」という、いかにも

教育には結びつかないように見えるテーマで、できる限りの頭と時間を使って頑張ってきました。その結果明らかになったことは、福井県の地質について新知見をもたらすものであり、地質学的なデータをこのようにして蓄積していくことが、地学教育においては大切になってきます。地学教育においては地域の特性に応じた教材の提示が必要になり、本研究を通して得た知見は野外実習などで活用できる基礎資料として重要であるように、学校で教える事を飛び越えた内容を研究しても、必ずそれは教育に結び付いてきます。したがって、卒業研究もまた、私が教員を目指すうえで、極めて重要な学びができた貴重な経験です。

このように私は、大学生生活 4 年間を通して、講義はもちろんのこと、探求ネットワークや教育実習、卒業研究など、様々な実践的な経験ができました。しかしながら、今胸を張って教育現場に出られるかと言われると、少し厳しいと感じているのが現状です。その根拠としては、実践的な授業はたくさんありましたが、どれも教員としての立場を経験したというよりは、あくまで大学生として教育に触れたところにとどまってしまったことがあります。加えて、専門としている理科に関しても、専門的な知識や技術はまだまだ未熟で、特に地学においては、卒業研究で行ってきたことについてまだやり切れていない部分もあり

ります。大学の 4 年間は非常に有意義で濃い時間を過ごせましたが、コロナも相まってまだまだ足りない、やりたかったことができていない状況です。何より、最初は難しすぎて、自分がやっていることが正しいのか、そもそも自分がやっていることの本質的な意義さえ分かっていないような所からスタートして、ようやく面白さに気づき始めた段階で、研究を終えてしまうことがもったいなく感じてしまっています。つまり、現状の私は、教員としてどう頑張っていけばいいのかが不明瞭で、理科教員になるうえで、もっと専門性を高めていきたいと考えています。

そこで教職大学院では、教員という立場での実践をじっくりと行い、自分がどういう教員になりたいのかをより明確にするとともに、教育現場に出ていくための自信をつけたいと考えています。少なくとも私は、私にしかできないような授業ができる理科教員になりたいと思っています。そのためには、教職大学院で学ぶこと、それ以上に、教員になってからも学び続けていくことが重要です。また、理科に関しても現在までの研究を引き続き行い、今以上に専門性を高めていきます。最終的には研究で得られた知見や結果を教材開発に繋げていくことで、教育現場に還元したいと考えています。

渡辺 昇希 わたなべ しょうき

初めまして。今年度より福井大学連合教職大学院の授業研究・教職専門性開発コースに入学しました渡辺昇希と申します。昨年度までは福井大学工学部応用物理学科に所属していました。小学校では野球、中学・高校ではバスケットボール、大学ではアメリカンフットボールをしていて体を動かすことが好きです。

私自身が不器用な性格で完璧主義者でもあったゆえ、勉強や部活でもなかなか結果が出ない現実を受け入れることができず、自己嫌悪に陥ることが多

かったのですが、中学・高校での先生が日々声をかけてくれて様々な形で自分を支えてくれました。高校 3 年生のころ、私がここまで来ることができたのはこれまで多くの先生が私を支えてきてくださったからだと感じ、社会人になったら次は私が子供たちを支える番であると考えました。これが、私が教師として将来仕事をしたいと志した理由です。

私はどの理系教科においても、教科書の中で理解できない公式や定理などが出てきたら物理書や数学書を読み漁り、分かるまでやるという勉強スタイル

でした。高校 3 年生のころ、進路相談で担任の先生から教育学部はいい意味でも悪い意味でも広く浅く勉強するから私の勉強スタイルを考慮して一度理学部に入って専門的に勉強してから教育学部で学べばいいのではないかと進言をいただき、福井大学工学部応用物理学科に入学しました。応用物理学科では高校物理で学んだ力学、熱力学、電磁気学、光学をさらに詳しく学び、これらの分野を応用した量子力学を学びました。高校では時間的にも学ぶ範囲に限界があるため公式の意味がおおよそでしか説明されておらず、各分野における学習範囲も限定されていますが、この学科では高校時代に習った公式が生まれた経緯やそれぞれの分野を深く学びます。私は応用物理学科で学んでいる間にこの考え方はこの公式を説明するために説明したほうが分かりやすいな、高校物理で習った公式って最終的にはこの考えに行きつくのか、など教育学部などで学ぶ物理に対しての視点とはまた違う視点から物理を眺めることができました。4 年生では研究室に配属され、主に素粒子物理学という宇宙に存在する未発見の物質や原子の起源について研究する学問を学びました。私にとってこの学問はかなり難しく、うまくいかなかったことのほうが多かったのですが、研究の過程で担当の教授から「論理」とは何か、実験を行う上で何事にも目的を持ち、実験結果から何が分かるかを整理することが重要であると学びました。このことを授業で生徒に教えるだけでなく、生徒指導や進路指導、その他多くの取り組みに対してどのようなことをすれば目

的を達成することができるのかを論理的に考えて 1 つ 1 つ整理しながら行動していくことに活かしていきたいです。

昨年の 5 月に 3 週間母校の高校で教育実習をさせていただきましたが、教員として仕事をするのははるかに難しいと痛感しました。あるとき教授から「人に勉強を教えるにはその人の 6 倍ほど勉強しなければいけない」と言われましたが、本当にその通りで当時は自分が思っていたよりも勉強不足であったことが原因で授業の段取りを練ることに行き詰まり、教える単元の範囲を勉強しながら段取りを考えていました。また授業を考えるのに精一杯で担当のクラスの生徒の名前も怪しいこともありもっと生徒のことをしっかり見ようとする意識が足りないと感じました。そして私は生徒には社会人になっても毎日が楽しいと思える人生を送ってほしいと思っており、そのために何事にも自分で決断して行動する力が必要であると考えています。自分が将来教員になって生徒を支えていくためにも昨年の教育実習の反省点を活かしつつ、この教職大学院で福井県で実施されている自ら学ぶ教育を学び、どのように授業を展開していけば授業が彼らにとって自分で考える訓練の場となるのかを考える基盤にしていきたいです。またインターンシップでの様々な活動で生徒と積極的に関わるようにして、生徒のことを第一に考えられるようになりたいです。今後ともよろしくお願いします。



開講式

2022年4月2日（土）午後、今年度の福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科（以下、教職大学院）の開講式が行われました。



昨年に引き続き、対面とオンラインを併用した開催となりましたが、東京サテライトの院生・スタッフが対面で参加するなど、和やかさの中にも活気のある開講式となりました。

今年度の新入学生は、授業研究・教職専門性開発コースが13名、ミドルリーダー養成コースが16名、学校改革マネジメントコースが28名の計57名となっています。

開講式では、冒頭の柳澤研究科長のあいさつ、オリエンテーションに続き、最初のグループセッションが開かれました。グループセッションでは、院生・スタッフがそれぞれの期待や不安を共有しながら、新しい年度の展望や思いについてじっくり話し合いました。



これから教職大学院の新たな1年が始まります。あらためて新入学の院生の皆さん、ご入学おめでとうございます。皆さんの実りある大学院生活を心よりお祈り申し上げます。



令和3年度 長期実践研究報告 作成一覧

令和3年度の修了生が作成した、長期実践研究報告の一覧です。

号	氏名	タイトル 副題
授業研究・教職専門性開発コース		
450	鈴木 克学	子どもを生かした教師になるために 授業参観者と授業実践者としての2年間の変容と成長をふり返る
451	三上 泰生	未来志向の教育を子どもと共に創造する 探究的な学びとその評価の実践から見えてくる教師の力量形成プロセス
452	畑中 良太	「生活」と結び合う音楽科カリキュラム
453	川西 雄太郎	「見えないもの」に目を留める 「違い」を「越える」ための社会科とコミュニティの模索
454	太刀川 京	教師としての自覚と責任の芽生え -省察と実践の積み重ねを通じ、専門的力を培う-
455	大西 美穂	対話から探る「ありのまま」の成長
456	福田 裕理	「モノとの対話を通して、自己を拓く」
457	仲村 俊太郎	自律への挑戦 子どもたちの生活や将来に生かすことができる学びとは
458	荒木 裕里香	「居場所」を求めて 集団の中で生きていくということ
459	岩城 つばさ	心を寄せる
460	蟻塚 知都	手で考えることによる自己の変容
461	川崎 太地	旅する教師 『共に創る』悩みと成長
462	藤本 紗奈	学校での自分の在り方を探る 多様であることが当たり前の価値を目指して
463	村林 雅也	集団での学び合い
ミドルリーダー養成コース		
464	佐々木 康順	語り合い、共に創る未来
465	市村 拓也	省察することの価値 ～記録の発展と共に深め広がる実践～
466	武居 悠輔	生徒・先生方と共につくり上げる学びを目指して 総合・部活・授業研究を通じたコミュニティづくりの記録
467	牛腸 つぐ実	教える教師から生徒を支える教師への変容 教育観の転換を俯瞰し総括して、「人はなぜ学ぶのか」
468	西川 くるみ	ひとりひとりが主人公であるために それぞれが主体性を発揮して
469	前田 美知恵	「主体的に取り組む生徒の育成を目指して」 「対話」を重ねながら、個別最適な学び、協働的な学びを育む
470	福田 亘哉	答えを求めない関わり 主体的な保育を求め続けた4年間

号	氏名	タイトル 副題
ミドルリーダー養成コース		
471	仲保 彰人	すべての生徒が参加できる授業づくり 学習の個別最適化をふまえて
472	菅野 多岐子	生徒の協働を支える教師の協働 関わり、つながり合う「本当」の教師を目指して
473	大菅 暢子	私の中に生き続ける学びの原風景 過去と現在が紡ぎ出す未来への物語
474	久保田 美千代	主体的な学びをつなぐ 子ども・地域・教師協働により、共同エージェンシーを育む
475	法土 明子	「出会い」がくれる宝物 「協働」「探究」「ICT」全ては人との出会いから
476	ROOPEN, CHARMOYL	Lesson Material and Material Lessons Supporting Students English Study Through Lesson Material
477	岡山 佳耶	文脈を理解し、個性を生かした保育の実践 子ども、保育者、コミュニティへと視点が広がる
478	黒津 彰紀	あなたと「共に」紡ぐ 10年の節目にあわせて
479	THORNTON, RYAN	The Golden Rule and Educational Practice Motivating Members of School Communities Through Fostering Reciprocal Respect
480	TJIPTO, WILLIAM	Improving My Practice as an ALT ～ Community, Communication, and Collaboration in the DPDT Program ～
481	伊井 昌彦	それでも教師は学び続ける 「ものづくりをひとづくりのために～工業高校での伴走記」
482	宮崎 亮太	「似する」から「似せぬ」、そして「似得る」へ 教師としての「からだ」をつくってゆく
483	金森 久貴	教師と生徒の良さを引き出す「場」を作る 誰もが働きやすく学び合える学校を目指して
484	石川 裕子	みんなが笑顔で過ごせる学校をめざして ～私たちができる持続可能な支援を探して～
学校改革マネジメントコース		
485	森下 文恵	できることから始める 学び合い、やりがいを持ち、笑顔あふれる学校へ
486	山中 太継	エージェンシーを育て人と組織を育てる
487	小竹 正純	支え合う学校の創造 「傾聴」を根本に「振り返り」を大切にして
488	渡邊 本樹	持続可能な学校文化を再創造する 学校を取り巻く文脈を生かしたカリキュラム・マネジメントの実現
489	渡邊 衣咲子	心に火を灯すマネジメント ～繋がり価値づけから生まれる灯と共有ビジョン～
490	渡辺 邦彦	楽しい授業づくりと 魅力ある学校づくりに向けて 子どもたちそして先生方とともに学び、育つ
491	南部 和江	子どもが幸せに生きるためのサポートをめざして 「共有・協働・連携」
492	鈴木 将乗	子どもの成長を支える学校コミュニティの創造 ～今までの教員人生を振り返りながら～
493	鈴木 千文	学びの土壌となる「場」 ～ヒトを育む場とは～

号	氏名	タイトル 副題
学校改革マネジメントコース		
494	松見 眞希	地域の未来と学校コミュニティ つながりの中で子どもと教師が共に育つ
495	遠藤 健	前へ進む力 学習活動を組織し、学校を（再）創造するために
496	森阪 美文	ともに学び ともに育む 多様な実践コミュニティでの学び
497	大野 隆次	コミュニティの望ましい連携のあり方 それぞれの立場におけるコミュニティの広がりを通して
498	林 雅則	「令和の校長」への学びを展望する これからの学校経営に求められる校長の専門的な力量形成を探る
499	野口 大輔	「教育」から「共育」、「競争」から「共創」へ アフターコロナを見据えた学校の在り方
500	川端 宏明	子どもも教師も「明日も通いたくなる学校」の創造をめざして ～点から線へ 線から面へ 「つながり」から広がる学び合うコミュニティ～
501	吉田 清子	学校改革をめざす組織開発への取組 対話による同僚性の構築
502	伊部 雅之	専門職としての教師の仕事を捉え直す 生徒と教師が共に創っていく学校をデザインするためのマネジメントを通して
503	ROSE, MICHAEL	Starting from Where the Learners Are: Cultivating Inquiries in the Classroom, School and Professional Learning Ecosystem
504	大野 靖幸	つなぐを意識したコミュニティ 「中学につなげる主体的・自律的な自主学習と三校合同探究プロジェクト」
505	對比地 覚	リーダーシップについての一考察 異なる立場から見たリーダーの行動指針
506	大井 和彦	未来社会構築への間接的貢献のために 自他未分から主客合一への一過程としての生徒会活動
507	城 恵美子	一人ひとり輝いてアンサンブル(協働)する ～幸せへの道を共に歩む～
508	伊藤 康弘	子どもと保育者が育ち合う、学び合う園を創る 園の魅力を作るささやかな試み
509	嵩谷 浩太郎	関係性の質の向上を通して、組織文化を改革する ～多様な人との関わりを楽しみながら、語り合い学び合う～

今回掲載した長期実践研究報告の入手を希望する方は、以下までお問い合わせください。

代表メールアドレス dpdtfukui@yahoo.co.jp

長期実践研究報告発行担当：宮下（masa-m20@u-fukui.ac.jp）

2022 年度(令和4年度) 福井大学大学院 連合教職開発研究科 年間計画

2022 年度の連合教職開発研究科の年間計画(4月7日現在)です。オリジナルの表を2ページに組み直して表示しています。予定は、随時変更があり得るのでご注意ください。

4	1 金		
	2 土	開講式	
	3 日		
	4 月		
	5 火		
	6 水	入学式	
	7 木		
	8 金	週間カンファレンス準備会 12:50-14:10 (授業研究・教職専門性開発コース)	
	9 土		
	10 日		
	11 月	前期授業開始	
	12 火	4系授業(4系免P1年次除く) 13:00-16:45	
	13 水		
	14 木		
	15 金	週間カンファレンス	
	16 土		
	17 日		
	18 月		
	19 火	4系授業	
	20 水		
	21 木		
	22 金	週間カンファレンス	
	23 土	月間合同カンファレンスA 9:30-17:00	
	24 日		
	25 月		
	26 火	4系授業	
	27 水		
	28 木		
	29 金	昭和の日	
	30 土	月間合同カンファレンスB 9:30-17:00	
5	1 日	オンサイト会場: 福井・東京 オンライン: Zoom	
	2 月		
	3 火	憲法記念日	
	4 水	みどりの日	
	5 木	こどもの日	
	6 金	週間カンファレンス	
	7 土		
	8 日		
	9 月		
	10 火	4系授業	
	11 水		
	12 木		
	13 金	週間カンファレンス	
	14 土		
	15 日		
	16 月		
	17 火	運営協議会(オンライン) 4系授業	
	18 水		
	19 木		
	20 金	週間カンファレンス	
	21 土	月間合同カンファレンスA	
	22 日	推薦入試①	
	23 月		
	24 火	4系授業	
	25 水		
	26 木		
	27 金	週間カンファレンス	
	28 土	月間合同カンファレンスB 9:30-14:00 オンサイト会場: 福井・岐阜 オンライン: Zoom	大学祭
	29 日		大学祭
	30 月		
	31 火	4系授業	

6	1 水		
	2 木		
	3 金	週間カンファレンス	
	4 土		
	5 日		
	6 月		
	7 火	4系授業	
	8 水		
	9 木		
	10 金	週間カンファレンス	
	11 土	特支ゼミ13:00-16:00	授業予備日
	12 日		
	13 月		
	14 火	4系授業	
	15 水		
	16 木		
	17 金	週間カンファレンス	
	18 土	シンポジウム 13:00-17:00	
	19 日	ラウンドテーブル 8:20-14:00	
	20 月		
	21 火	4系授業	
	22 水		
	23 木		
	24 金	週間カンファレンス	
	25 土		
	26 日		
	27 月		
	28 火	4系授業	
	29 水		
	30 木		
7	1 金	週間カンファレンス	
	2 土	月間合同カンファレンスA	
	3 日		
	4 月		
	5 火	4系授業	
	6 水		
	7 木		
	8 金	週間カンファレンス	
	9 土	月間合同カンファレンスB	
	10 日		
	11 月		
	12 火	4系授業	
	13 水		
	14 木		
	15 金	週間カンファレンス	
	16 土		
	17 日		
	18 月	海の日	
	19 火		
	20 水		
	21 木	※それぞれaかbいずれか一方に出	
	22 金	夏期集中講座Cycle1a* 9:30-17:00 オンサイト会場: 福井・奈良・東京 オンライン: Zoom	授業予備日
	23 土		
	24 日		
	25 月	夏期集中講座Cycle1b* 9:30-17:00 オンサイト会場: 福井・岐阜 オンライン: Zoom	免許状更新講習第1回
	26 火		
	27 水		
	28 木	※それぞれaかbいずれか一方に出	
	29 金	夏期集中講座Cycle2a* 9:30-17:00 オンサイト会場: 福井・奈良 オンライン: Zoom	授業予備日
	30 土		
	31 日		

8	1 月	夏期集中講座Cycle2b* 9:30-17:00 オンサイト会場: 福井・岐阜 東京の宮古 オンライン: Zoom	
	2 火		
	3 水		
	4 木		宮古島ラウンド テーブル
	5 金	夏期集中講座Cycle3a* 9:30- 17:00 オンサイト会場: 福井・奈良・岐阜 オンライン: Zoom	
	6 土		
	7 日		
	8 月	オープンキャンパス準備	免許状更新講習第2回
	9 火	オープンキャンパス	
	10 水		
	11 木	山の日	
	12 金		
	13 土		
	14 日		
	15 月		
	16 火		
	17 水	夏期集中講座Cycle3b* 9:30-17:00 オンサイト会場: 福井	文京停電 (AOSSA)
	18 木		
	19 金	特支ゼミ9:00-16:00	
	20 土		
	21 日		
	22 月		
	23 火		
	24 水		
	25 木		
	26 金		
	27 土		
	28 日	入試事前説明会①(オンライン)	
	29 月		
	30 火		
	31 水		
9	1 木		
	2 金		
	3 土		
	4 日		
	5 月		
	6 火		
	7 水		
	8 木		
	9 金		
	10 土	特支ゼミ13:00-15:00	
	11 日		
	12 月		
	13 火		
	14 水		
	15 木		
	16 金		
	17 土	夏期集中講座Cycle3C* (予 備日) 9:30-17:00	
	18 日		
	19 月		
	20 火		
	21 水		
	22 木		
	23 金	秋分の日	
	24 土		
	25 日		
	26 月		
	27 火		
	28 水		
	29 木		
	30 金		

10	1	土	推薦入試②	
	2	日		
	3	月	後期授業開始	
	4	火	4系授業	
	5	水		
	6	木		
	7	金	週間カンファレンス	
	8	土		
	9	日		
	10	月	スポーツの日	
	11	火	4系授業	
	12	水		
	13	木		
	14	金	週間カンファレンス	
	15	土		福井大学きてみてフェア
	16	日		
	17	月		
	18	火	4系授業	
	19	水		
	20	木		
	21	金	週間カンファレンス	
	22	土	月間合同カンファレンスA	
	23	日		
	24	月		
	25	火	4系授業	
	26	水		
	27	木		
	28	金	週間カンファレンス	
	29	土	月間合同カンファレンスB	
	30	日		
	31	月		
11	1	火	4系授業	
	2	水		
	3	木	文化の日	
	4	金	週間カンファレンス	
	5	土		
	6	日		
	7	月		
	8	火	4系授業	
	9	水		
	10	木		
	11	金	週間カンファレンス	
	12	土		
	13	日		
	14	月		
	15	火	4系授業	
	16	水		
	17	木		
	18	金	週間カンファレンス	
	19	土	月間合同カンファレンスA 9:30-14:00 オンライン会場: 福井・岐阜 オンライン: Zoom (長期実践報告作成のためのガイダンス14:30-)	
	20	日	奈良RT	
	21	月		
	22	火		水曜日授業
	23	水	勤労感謝の日	
	24	木		
	25	金	週間カンファレンス	
	26	土	月間合同カンファレンスB 文京 9:30-14:00 (長期実践報告作成のためのガイダンス14:30-) 東京RT	授業予備日
	27	日		
	28	月		
	29	火	4系授業	
	30	水		

12	1	木		
	2	金	週間カンファレンス	
	3	土	特支ゼミ13:00-16:00	
	4	日		
	5	月		
	6	火	4系授業	
	7	水		
	8	木		
	9	金	週間カンファレンス	
	10	土		
	11	日		
	12	月		
	13	火	4系授業	
	14	水		
	15	木		
	16	金	週間カンファレンス	
	17	土		学部公開クロス
	18	日		
	19	月		
	20	火	4系授業	
	21	水		
	22	木		
	23	金		
	24	土	冬期集中講座a 9:30-17:00 オンライン会場: 福井・奈良・東京 オンライン: Zoom	授業予備日 入試説明会② オンライン
	25	日		
	26	月		免許状更新講習第3回
	27	火		
	28	水		
	29	木		
	30	金		
	31	土		
1	1	日		
	2	月		
	3	火		
	4	水		
	5	木	冬期集中講座b 長期実践研究報告の作成 9:30-17:00	
	6	金		
	7	土		
	8	日	予備日 長期実践研究報告の作成 (予備日)(9:30-17:00)	
	9	月	成人の日	
	10	火	4系授業	
	11	水		
	12	木		
	13	金	週間カンファレンス	
	14	土	大学入学共通テスト(予定)	
	15	日	大学入学共通テスト(予定)	
	16	月		
	17	火		
	18	水	4系授業	
	19	木		
	20	金	週間カンファレンス	
	21	土		
	22	日		
	23	月		
	24	火	4系授業	
	25	水		
	26	木		
	27	金	週間カンファレンス	
	28	土		
	29	日		
	30	月		
	31	火	長期実践研究報告締め切り	授業予備日

2	1	水		
	2	木		
	3	金	週間カンファレンス予備日	
	4	土	第2回入試	
	5	日	長期実践研究報告会 9:30-12:30	
	6	月		
	7	火		
	8	水		
	9	木		
	10	金		
	11	土	建国記念の日	
	12	日		
	13	月		
	14	火		
	15	水		
	16	木		
	17	金		
	18	土	シンポジウム 12:00-17:40	
	19	日	ラウンドテーブル 8:20-14:00	
	20	月		
	21	火		
	22	水		
	23	木	天皇誕生日	
	24	金		
	25	土	学部個別試験(前期)	
	26	日		
	27	月		
	28	火		
3	1	水		
	2	木		
	3	金		
	4	土	第3回入試	
	5	日	特支ゼミ13:00-16:00	
	6	月		
	7	火		
	8	水		
	9	木		
	10	金		
	11	土		
	12	日	学部個別試験(後期)	
	13	月		
	14	火		
	15	水		
	16	木	運営協議会	
	17	金	インターンシップ説明会	
	18	土		
	19	日		
	20	月		
	21	火	春分の日	
	22	水		
	23	木	学位記伝達式 18:00-20:00	
	24	金		
	25	土		
	26	日		
	27	月		
	28	火		
	29	水		
	30	木		
	31	金		



福井大学教育学部附属幼稚園・義務教育学校 令和4年度 教育研究集会 (第1次案内)

幼稚園研究主題

「つながりが育む学びの深まり」

幼稚園研究副題

「好きが広がり、世界をひらく」

6月3日(金)

6月4日(土)

義務教育学校研究主題

「自律的な学びへのイノベーション
探究するコミュニティを培う」

義務教育学校研究副題(4年次)

「子どもと共に学びの価値を繰り上げる」

教育研究集会の詳細は4月下旬発送予定の第2次案内や本校HPにて改めてお知らせします。
新型コロナウイルスの感染状況により実施方法等が変更になることがあります。

随時掲載の拠点校・連携校の研究会の情報です。今号は福井大学教育学部附属幼稚園及び義務教育学校です。

授業公開

幼稚園での「遊び」や「みんなの時間」、文部科学省研究開発学校(第4年次)として研究を進めている「社会創生プロジェクト」、そして各教科の探究的な学びを公開します。子供の学びについて共に語り合しましょう。



幼稚園の「遊び」「みんなの時間」



社会創生プロジェクト



各教科の探究的な学び

シンポジウム

学習院大学教授 秋田喜代美氏、上智大学教授 奈須正裕氏にシンポジストとしてお越しいただきます。

詳細は、4月下旬発送予定の第2次案内にてお伝えします。

- 幼稚園・義務教育との接続に興味がある方
- 総合的な学習の時間と教科の学びの往還に興味がある方
- 授業実践を語り合い、教育全般および専門教科の実践力を高めたい方
- プロジェクト型学習や探究的な学びに興味・関心がある方
- 近年の教育改革などの教育情勢の動向について興味・関心がある方等、是非本会へご参加ください。

所在地

福井大学教育学部附属幼稚園
福井大学教育学部附属義務教育学校
〒910-0015
福井県福井市二の宮4丁目45番1号
TEL:0776(22)6687【幼稚園】
:0776(22)6891【前期課程】
:0776(22)6985【後期課程】

会場までのアクセスは
右記のQRコード、もしくは、
下記 URL より
接続される本校HPにて
ご確認ください。



<http://www.f-edu.u-fukui.ac.jp/~fuzoku-g/>

お問い合わせ先

福井大学教育学部附属義務教育学校 担当：森川

Tel 0776-22-6985 /Fax 0776-22-6703 Email: fukuifuzokugimu@gmail.com

【巻頭言で柳沢研究科長から紹介のあったテキストを以下のとおり掲載します】

カント『永遠平和のために』(岩波文庫ほか)『教育学』(カント全集 17, 岩波書店, 2001)

南原繁「カントにおける世界秩序の理念」(同『国家と宗教』南原繁全集, 第1巻, 1972)

ハーバーマス「二百年後から見たカントの永遠平和という理念」(『カントと永遠平和』未来社, 2006)

シュナイウインド『自律の創成: 近代道德哲学史』法政大学出版局, 2011.

網谷荘介『共和制の理念: イマヌエル・カントと18世紀末プロセインの「理念と実践」論争』法政大学出版局, 2018.

柳沢昌一「近代教育の理念に関する二つの省察: 南原繁とカントにおける人格と公共性」教師教育研究 2, 2009.

Schedule

4/23,24 Sat. Sun. 月間カンファレンス A 日程、**4/30,5/1 Sat. Sun.** 同 B 日程

5/17 Tue. 運営協議会

5/21 Sat. 月間カンファレンス A 日程、**5/28 Sat.** 同 B 日程

6/18,19 Sat. Sun. 実践研究 福井ラウンドテーブル **2022 Summer Sessions**

Newsletter は、教職大学院に関わる皆様の協力で作られています。
修了生の皆様もご自身の実践や近況について投稿してみませんか。
関心がある方は、dpdtfukui_n1@yahoo.co.jp までご連絡ください。

【編集後記】教職大学院にとっての新しい1年が始まりました。今年は気候の関係か、新たな年の始まりに長い時間「桜」が寄り添ってくれたような気がします。
私も2年目にして福井県のさまざまな桜を堪能しました。
この1年も福井の季節の移ろいを楽しみながら、院生・スタッフの皆さんに読み応えのあるNewsletterをお届けできればと思っています。よろしくお願いします。(H・T)

教職大学院 Newsletter **No.158**

2022.5.23 公開版発行

編集・発行・印刷
福井大学大学院 福井大学・
奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学
連合教職開発研究科
教職大学院 Newsletter 編集委員会
〒910-8507 福井市文京 3-9-1
dpdtfukui@yahoo.co.jp